研究ノート

契沖和歌資料拾遺（続）

乾　　善　彦

要　　旨：前号に引き続き、関西大学図書館蔵契沖和歌軸の紹介をおこなう。今回は2021年度新収「秋歌四首」の軸装一紙一軸。『漫吟集類題』との異同が大きいことを指摘。あわせて、架蔵短冊資料二軸の紹介もおこない、これらの集成の意義を考える。

キーワード：契沖、和歌資料、短冊資料

はじめに

前号に続いて、契沖の新出和歌資料を紹介する。

岩波書店版『契沖全集』第十六巻（1976）には、第十三巻「和歌」（1973）にもれた和歌資料がまとめられている。天理図書館蔵『漫草』および『自詠自註歌』、自筆詠草断簡として先に紹介した国立国会図書館蔵「圓珠菴契沖詠草〈歌廿五首〉」、天理図書館蔵「蓮の詠草」のほか、岡本茂氏蔵「契沖自詠三十一首」、高野山清浄心院契沖遮梨書簡中の「冬の歌」、築島裕氏蔵「あねにをくれたる人にをくる哥」、木村秋雨氏蔵「圓珠庵契沖無常長歌」、九州大学文学部蔵「詠草切」の計七点と、「和歌拾遺」として、三手文庫本漫吟集所収の「詠慶賀百二十首和歌」、萬葉緯所載歌、圓珠雑筆所載歌、契沖著述所見歌という見出しで、歌集の体裁をもたない歌歌が収められる。ただし、このような断簡はまだまだ巷間にあって、それぞれにそれなりの価値を有する。

前号では、「関西大学図書館蔵契沖和歌資料二軸」と題して、蓮歌十首と立春七首の二軸を紹介した。前者には天理図書館蔵の蓮の詠草、後者には国会図書館蔵の秋歌二十五首の類例があり、それぞれに個別のものではあるが、断簡資料を全体としてながめる視座が必要であることを述べた。

今回は、今年度新収の一軸を紹介するとともに、和歌軸とはことなる観点から、短冊資料についても考えてみたい。

1．関西大学図書館蔵［契沖和歌稿］　N8C2*911.15*3　資料ID 212293796

本軸は2021年新収の和歌軸であり、『漫吟首類題』（以下『類題』と略称する）巻六秋歌上「秋夕」にみえる二首、同巻七秋歌中「秋風」にみえる一首、そして同「八月十五夜」にみえる歌一首の四首からなる軸装一紙、冒頭「秋夕」の下に「契沖」の署名がある。以下、本軸を「秋歌四首」と呼ぶことにする。

まず、図書館による書誌情報を掲げる。

［契沖和歌稿］／契沖［著］
［書写地不明］：契沖［自筆］,［書写年不明］
１軸；43.3cm
箱蓋紙の書名：契師秋歌 四首
本紙の大きさ：21.9×22.0cm
内容：（本紙の翻刻なので省略）
箱蓋裏書：入江壽喜謹定
付属物：翻刻文１枚,「契沖和歌」１枚

若干補足しておく。料紙は薄手の鳥の子。汚れているので、漉き直し紙のようにも見える。軸の大きさは、縦113cm、横43cm。最終歌の末は擦れて読みにくいところがあるが、かろうじて、翻刻のように判読できる。

前号と同様に漫吟集類題との異同を示しながら、全文を掲げる。

秋夕　　契沖	漫吟集類題
友もなしある世なりともおほかたは	
さひしかるへき秋のゆふへを（2464）	秋の夕暮れ（ゆふへをイ）
なにはかたきりまの小舟こきかへり	
けふもきのふの秋のゆふくれ（2450）	けふもきのふもおなし夕暮
秋風	
みるまゝにいわへの真葛は吹過て	さわきにし野への真葛は吹過て
をかへにかへる松かせのこゑ（2210）	
八月十五日月よけんと見えし空の	詞書ナシ
夕くれよりにはかにくもりけれは	
今たにもいつくゆふたつあまくもの	
こよひの月をうたかはすらん（2567）	

一首目、「秋の夕暮れ」には「ゆふへをイ」の注記があり、諸本間に異同がある。『類題』の本文が最終案だとすると、この本文はそれ以前の形をつたえていることになる。ただし、結句「秋の夕暮れ」はあまりにも凡庸。「秋のゆふへを」の方が余情があっていいようにおもわれるがいかがか。二首目の「けふもきのふの秋のゆふくれ」は、『類題』の「けふもきのふもおなし夕暮」にくらべると、やや理にはしった感があるが、『類題』のようにしてしまうとかえって平凡な句となっている。この二首は『類題』巻七秋歌中におかれた「秋夕」の冒頭と末尾に位置している。

三首目は秋歌上におかれた「秋風」の末尾に位置する。初句と第二句の前半が大きく異なっている。この形は他にはみえない。ちなみに、初句「みるままに」は、秋歌中「秋夕」に、

見るまゝに梢の夕日庭に落ちてくらき草葉に露白くみゆ（2453）

がある。

四首目は「八月十五夜に」で一括された歌群の末尾に位置し、次歌（2568）には「八月十五夜、よひのほと雨ふりけるを、ふけてのちすみけれは」という詞書がある。

四首のうち三首まで本文に異同があり、また、四首目の詞書は漫吟集『類題』にはないものであり、貴重である。この詞書は、今のところ管見に入らない。前号の二点は、いずれも天理図書館であったり、国会図書館であったり、類似の比較できる資料が存したが、今回紹介するものは、他に比較できるものがなく、また、今まで知られていなかった詞書を有するなど、興味深い資料といえよう。今後、『類題』諸本との照合や、他の和歌資料を博捜するなど、本軸の成立状況を考える必要があろう。前号のもそうだが、軸物の成立事情には不明な点が多い。自筆とみられることの真偽も含めてさらに検討が必要である。

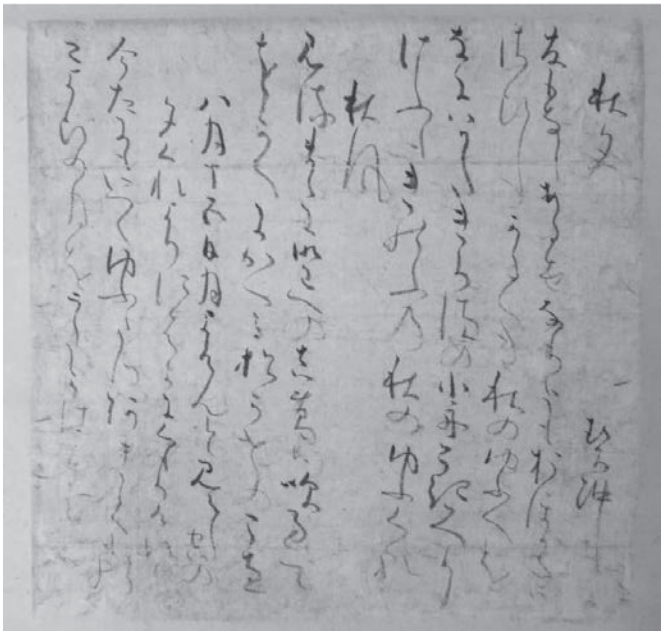

図１　関西大学図書館蔵［契沖和歌稿］

２．短冊二点

手元に、契沖の和歌をしるした短冊が二点ある。短冊はやはり巷間にでまわっており、入手はそれほど困難ではない。以前に契沖阿闍梨顕頌会蔵の色紙・短冊帖が紹介されたことがあるが（大阪国文談話会編『色紙・短冊帖 契沖阿闍梨顕頌会蔵』（1992、和泉書院））、色紙や短冊には契沖の署名のあるものが多く存しており、なかに、『類題』とは異同のあるものも少なくない。

一点目は、『詠富士山百首』のうちの一首、

　をとめこかふしのみゆきの下かさね／あまのはころもなるゝよもなし　契沖

である。『詠富士山百首』は、単独で版行されており、関西大学図書館にも、寛政十一年版と寛政十二年版の二本が蔵されている。そのほか、『類題』には、巻十九雑歌三に「詠富士山百首和歌」がある。ただし、『類題』では初句「をとめらか」となっており、版本の『詠富士山百首』とは異なる。本短冊は、版本の『詠富士山百首』と同文である。

もう一点は、

　社頭／紅葉　神のよる梢に今もみるはかり　もみち下てる姫こその宮　契沖

とある。『類題』巻八秋歌下（2964）に収められた一首。龍公美本『漫吟集』巻八秋歌下にも見える（1631）が、結句が「ひめこそのもり」となっており、異同がある。三家集本（版本、関西大学蔵写本）には、この歌はみえない。

をとめこか　　社頭紅葉

図２　短冊二点　架蔵短冊

おわりに

岩波書店版『契沖全集』は、最終巻（第十六巻）に諸書の書入二に続いて、遺文書簡集として第十三巻和歌にもれた歌うたの断片的な資料を収める。ただし、契沖は自署した断簡的な資料を多数ものしており、その集成は容易ではない。年々新しい資料が出現するという現実がある。また、そこに自筆とおぼしい短冊資料はみえない。これも巷間にでまわっている多数の資料がある。いずれも、そこには現在までに知られている和歌本文とは異なる歌句をもつものが多数存在する。今後、こういった資料を集成することも、契沖の遺業を考えるうえで重要であると考える。『契沖全集』（補遺）のような歌文の集成が期待されるのである。

付記

図版の掲載については関西大学図書館の許可をいただいた。御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金基盤研究（B）（代表：田中大士）および基盤研究（C）（代表：佐野宏）、同じく基盤研究（C）（代表：乾善彦）の研究成果の一部でもある。

（いぬい　よしひこ　関西大学文学部教授）